

無事の人

山本有三著

山本有三著

無事の人

新潮社版

無事の人

定價一三〇圓
地方賣價 一三七圓

昭和二十四年十月二十一日 印刷
昭和二十四年十月二十五日 發行

著 者 山 本 有 三

發行者 佐 藤 義 夫
東京都新宿區矢來町七十一番地

印刷者 山 元 正 宜
東京都文京區柳町二十六番地

發行所

東京都新宿區矢來町七十一番地
株式會社 新 潮 社

電話九段(33) 二四六・二四七
二四八・二四九

無
事
の
人

題
字

鈴
木

大
拙

宇多は顔を洗うと、庭げたを突っかけて、海岸へおりて行つた。霧が深いので、あたりのけしきは、何も見えなかった。すべてが灰いろに塗りつぶされているので、つい、三、四メートルさきの松の木さえ、それとは見わけられないほどだった。しかし、朝の空気が非常に氣もちがよかつた。カミソリで、えりもとを軽くなでられるような、すつとした感じである。こんな氣分を味わつたことは、近ごろにないことである。ゆうべのあんまがきいたのかもしれない。ゆうべは、いつになく、ぐっすり眠れた。

霧の中からさゞ波の音が靜かに聞こえてくる。彼は久しぶりで海のしらべを聞いた。しかも、それが深い霧の中から響いてくるので、ひとしお趣きがあつた。

ザブウツ、ザブウツという單調なくり返しではあるが、その單調なくり返しのなかに、何かゆったりしたものがひそんでいた。動くもの、くだけるもののなかに、動かないもの、くだけないものが、大きくからだに傳わってくる。

「海はいいなあ。」

彼は、そう思わないではいられなかった。海のながめは、すっかり閉ざされているにもかゝわらず、せわしないさゞ波の音のなかから、不思議にひろくとしたものを感じるのである。彼は海のほうに向かつて、大きく深呼吸をした。

それにつけても、ゆうべこゝにやつてきて、いいことをしたと思った。今ときこういう所にくるのはどうかと思つて、なか／＼ん踏ざりがつかなかったのだから、迷つたことが、むしろおかしいくらいだった。

足もとを見ると、厚い、灰いろの幕のすそを少しもちやげて、白いものがあたまをだしては、かわいらしく、砂の上にころがっていた。こゝはうち海なので、

波も湖水のようにおだやかだった。

彼は海岸をひと歩きして、お宮のある松ばやしのなかに出た。それから宿やのよこ手の粗末な入り口をはいつて、へやのほうへ帰って行つた。この宿には三年に一度か、四年に一度ぐらいしかきていないけれども、昔からのなじみなので、いっばし様子（ヨウス）を知っているつもりで、そんな抜け道を選んだのである。ところが、少し行くと、うしろのがけが宿やの建てものに、のしかゝるように迫っていて、この道が通りぬけられるのかどうかさえ、怪しくなってきた。軒の下を見ると、さかなを運んできたらしい竹かごや、あきだるなどが置いてあつた。どうも料理場の裏ぐちらしい。

これはいけないと、宇多は思つた。ひつ返そうか、通りぬけようか、彼はちよつと思案した。ふと横を見ると、うしろのたか台から落ちてくる、細い流れのそばに、なんか黒いものがうすくまっていた。霧がたちこめているので、よくわか

らなかったが、じいつとすかして見ると、やゝ小がらの老人が、余念もなく刃ものをといでいるのだった。まるでトイシに吸いつけられているように、人の近づいたことも、てんで気づかない様子だった。

その男は、ゆうべ呼んだあんまによく似ていた。からだのがつしりしているぐあいから、にがみばしった顔つきまで、そっくり、そのまゝである。しかし、まさか目くらが刃ものをといでいるはずもあるまい。たぶん、料理番かなにかだろうと思つた。それにしても霧のなかで、じいつと目をつむつて刃ものをといでいるこの老人は、なんという、りんとした構えであろう。それはたゞ指のさきを動かしているのではない。腕で、肩で、腰で、いや、からだ全体でといでいるのだ。口を結び、いきをこらして、身も、たましいも、ことごとく、ちいさい光るものの上に集中させていた。それは、さながら神に祈りをさゝげている人の姿だ。静かでありながら、近づく、はじき飛ばされそうなものを、あたりにたゞよわせ

ていた。

こんなに一心に刃ものをといている人間を見たことがない。宇多はその真剣さにけおされて、この男にことばをかける氣になれなかった。彼は静かにくびすを返して、あともどりをした。

この宿やは、もと個人の別荘であつたが、それが拡張されて旅館となり、今では別に立派なホテルまでも建っているくらいで、敷き地が、なん万つぼというほどあるのだから、うら口なぞからはいると、つい、まいごになつてしまう。そこで今度は、おもて門のほうへまわつて、やつとへやにもどつた。

肉食を禁じられてる彼は、わざと日本館のほうを選んだのだが、へやにはいると、テーブルの上に、朝の食事がならんでいた。たぶん、散歩に出たあいだに、女中がおいて行つたものに相違ない。太平洋戦争が始まつて以來、どこの宿やでも、こういうことになつてしまった。

ミソしるのふたをとると、あつたかい湯げがぼうつと立つた。まだ置いて行つて、まもないものらしい。なかみは前の海でとれたアサリである。もうそろくしゅんではなくなるが、とりたてのせい、おわんのなかから、海のかおりが傳わってくるような氣がした。

食事のあと、彼はカバンの底から、ハترونで表紙をくるんだ一冊の洋書を取りだした。これは眞珠湾攻撃の翌年、出版された本であるが、最近の交換船で帰つてきた友人が、ぜひ目を通しておくようにと言つて、こつそり貸してくれたのである。ウェルズ大学の國際政治学の教授、エドワード・ハレット・カーの書いたもので、「平和の條件」という本である。「平和の條件」などという書物は、今日の時勢とは全く逆行しているものだが、しかし逆行しているのは、この本ではなくて、むしろ今日の時勢であろう。彼はこの本を手にすることに相当の危険を

感じながらも、そういう危険のなかで、そつとページをめくることに、言いしれぬ喜びを持っていた。彼がこゝにやってきたのは、一つは医者から注意を受けたためであるけれども、第一の目的は、だれにも妨げられずに、早くこの本を読み通すことだった。そして、長くは借りておけない本だから、重要な点だけ、ノートをしておこうという計画なのである。

彼はすぐ読みだした。海外でも評判の高いものだというだけあつて、さすがにおもしろい。彼はコンサイスを手にながら、しきりに横もじの上に、目を走らせていた。

女中がおぜんをさげにきた。宇多は女中の顔を見たら、ふと、あんまが頼みたくなつた。ゆうべは珍しく眠れたけれど、たまに眠れたせいかな、かえつて、疲れが出てきたような気がする。

「ねえさん、すまないが、ゆうべのあんまさんと呼んでくれないか。」

「まあ、おあいにくですこと。あのあんまさん、たつた今、よそのお座しきへ出たばかりなんで。それじゃあ、すぐ、かわりをお呼びいたしましょう。」

「いや、かわりでなく、あの人がいいね。あのあんまさん、なか／＼うまいよ。」
「どなたも、そうおっしゃるんでございますよ。よほど腕がいいようでございますか、すね。けさのお客さまなんかも、お名ざしで——へえ、名まえでございますか、爲さんというんです。ほかのあんまさんじゃお氣に召さないんで、ゆうべのうちからお頼みになっていて、お目ざめになると、そのまゝおとこの中でおとりになったんでございますよ。それで、けさは早くから仕事にまいっております、ついさつきまで、手がすいておりましたのに、ほんとうに惜しいことをいたしました。ひと足ちがいで……」

「それじゃあ、向こうがすんでからでいいよ。」

食事のあとだから、そのほうがかえっていい、と宇多は思った。しかし、女中

のことばで、ふと霧の中の男のことが、あたまに浮かんだ。

「あのあんまさん、さつき、裏のほうで見かけたような氣がするんだが、ちがうかしら。」

「散歩においでになつた時ですか。そうかもしれません。それじゃあ、カミソリをといでやしませんでしたか。」

「あゝ、なんか刃ものをといでいた。——あの人、いくらか見えるの。」

「いゝえ、ちつとも見えやいたしません。」

「それで、よくとげるね。」

「とげますとも。そりゃあ、カミソリとぎに とがしたよりも、爲さんにといでもらつたほうが、ずっと切れますわ。ですから、あの人の手がすいていると、みんな、いろんなものをといでもらうんですの、なんでも、もとは大工（ダイク）さんだつて話しですわ。ことばが、ぞんざいでございましょう。」

「そうだね。しかし、あのほうが飾りがなくて、かえっておもしろいよ。」

ゆうべは、たいして話しもしなかったが、あんなにしては、ぶつきらばうなこ
とばだと思った。なるほど、そう言われると、職人あがりのような氣もする。彼
は随分あんなをとったけれども、大工あがりのあんなというのは、これが初めて
だった。

女中が去ると、宇多はまた本を開いた。読んでゆくうちに、「戦争というもの
は決して終局のものではない、いつも新しい秩序の発端（ホッタシ）なのである。」
ということばにぶつかった。彼はひやつとした。

いま國民は、この戦争をたゞかい抜こうとしている。いや、たゞかい抜くこと
をしいられている。しかし、たゞかいが済んだら、どうするのだろう。たゞか
い抜くなどと言っても、日本はもう息ぎれがしているのだ。このまゝではとても
勝てるとは思えない。よし、仮りに勝ったとしても、それで、すべてのかたがつ

くものではない。この本の著者が言っているように、戦争は、むしろ次ぎの、いい幕あきななのだ。しかも、この次ぎの幕は、今の戦争よりも、もっと重くるしいものにならないと、だれが言えよう。まだ読みだしたばかりだから、よくわからないが、著者は戦争のあとに、一種の進歩的革命？を予想しているもののように思われる。

もちろん、この本はイギリスで出たものであるから、イギリス、またはヨーロッパの問題が中心になっている。ジャバンということばも、たまには出てくるが、日本に関することは、ほとんど論じられていない。しかし、日本人である宇多はこういう本を読んでいながら、そのものあいだから、しきりに「日本」を読むとうろとしていた。彼にとっては、現在の戦争ももとより氣がかりだが、戦争のあとに起こってくる事からのほうが、もっと心配だった。

彼はぱたりと本を閉じて、顔をあげた。いつのまに霧が晴れたのだろう。そと

には明かるい日がさしていた。女中の話しでは、けさのような深い霧は、このへんでは、ついぞ無いことだというが、さつきまでは、一面に灰いろの世界だったのに、まるでちがった世の中が出現したような気がする。

目の前には、緑の海が美しく広がっていた。遠くに、かすみのように、あわくたなびいて見えるのは、このうち海を抱えているアツミ半島であらう。あちこちに、いくつも島がちらばっている。近くには、タケ島がくつきりと姿をあらわしていた。島へ渡るコンクリートの橋が、白く光っている。月なみのようではあるが、ちいさな漁船が一、二はい浮かんでいるのも、なごやかな風景である。風もないと見えて、海上には、しら波も立っていない。まったく、平和そのもののようないしきである。きょうも、どこかで、人と人が殺し合いをやっているに相違ないが、このけしきを見ると、どこに戦争があるのかという感じである。

けれども、日華事変がおこってから八年、第二次欧州大戦がはじまってから五